

元老西園寺公望と政権の推移

—— 日本的、政党政治から

—— 日本的、ファシズムへ ——

永 井 周

Genro Kimmochi Saionji and Cabinet Changes

—— from Japanesque party cabinet system to Japanesque fascism ——

Makoto Nagai

目 次

はじめに

本 文

1. 二元老（松、園公）、清浦を奏薦〔23清浦内閣成立
2. 元老園公、加藤（高明）を奏薦、松公は奉答辞退〔24加藤内閣成立
3. 元老、再び加藤を奏薦〔25加藤第2次内閣成立
4. 元老、若槻を奏薦〔26若槻内閣成立
5. 元老、田中を奏薦〔27田中内閣成立
6. 元老、浜口を奏薦〔28浜口内閣成立
7. 元老、再び若槻を奏薦〔29若槻第2次内閣成立
8. 元老、犬養を奏薦〔30犬養内閣成立
9. 5.15事件直後、
元老、内府・枢相・その他の重臣に諮り、齋藤を奏薦〔31齋藤内閣成立
10. 元老、内府・枢相を含む重臣会議に諮り、岡田を奏薦〔32岡田内閣成立
11. 2.26事件直後、
元老、枢相・宮相に諮り、近衛を奏薦、近衛大命を拝辞、
元老、改めて枢相に諮り、広田を奏薦〔33広田内閣成立
12. 元老、内府に諮り、内府に託して、宇垣を奏薦〔宇垣内閣流産
13. 元老、内府に諮り、内府に託して、第1候補平沼・第2候補林と奏薦、平沼
辞退〔34林内閣成立
14. 内府、枢相・元老に諮り、近衛を奏薦〔35近衛第1次内閣成立
15. 内府、元老に諮り、平沼を奏薦〔36平沼内閣成立
16. 内府、枢相・元老に諮り、阿部を奏薦〔37阿部内閣成立

17. 内府、枢相・その他の重臣・元老に諮り、米内を奏薦〔㉞米内内閣成立
18. 内府、枢相を含む重臣會議に諮り、再び近衛を奏薦、元老は奉答辞退〔㉞近衛第2次内閣成立

註 10.の重臣會議と、18.の重臣會議とはやや構成を異にし、前者は、元老、内府、枢相、総理大臣前官礼遇者によって、後者は、内府、枢相、総理大臣前歴者によって構成された。

なお、18.以降は、18.の手續によって後継首班の奏薦が行われた（第㉞代近衛第3次内閣、第㉞代東条内閣）。

結びにかえて

はじめに

ここに書く時期は、

1923・大正12年末から、1940・昭和15年末までである。

それは、^レ日本的、政党内閣が連続して組織される直前の第㉞代清浦内閣から、第㉞代第2次近衛内閣治下で最後の元老西園寺公望が没するまでの約20年間である。

内閣の交替、とりわけ元老による後継内閣総理大臣の奏薦に焦点をあてながら、^レ日本的、政党内閣を圧迫しつつ台頭してくる^レ日本的、な軍部ファシズムの嵐に対して、元老西園寺が、後継首班奏薦権をほぼ唯一の武器として、どう抵抗し、どのように挫折していったか、そしてやがて、彼が育成したり、嘗って奏薦したりした重臣たち（内大臣を中心に 枢密院議長、前内閣総理大臣）の會議に奏薦権を移行させつつ、天皇国家の行末を案じながら、政權中枢から後退して行く過程を描いてみたいと思う。

そして、それらを通じて、大日本帝国憲法下の立憲君主臣僚政が、いわゆる政党内閣の時代には立憲君主議會政に近づいたけれども、これと同一化して定著することができないうちに、實質的には君主軍僚制（^レ日本的、ファシズム）に墮して行く過程が、少しでも明らかになれば、幸いである。

また、そのことが、専制政に対する民主政のよさを知り、専制的行動様式を排して民主的行動様式を育てる手がかりになればと思っている。

本 文

1. 二元老（松、園公）、清浦を奏薦〔㉓清浦内閣成立

山本権兵衛（1852・嘉永5.10.15～1933・昭和8.12.8）の第2次内閣は、成立後、3カ月余りで虎門不敬事件の責任をとって総辞職した（1923・大正12.12.27）。そのあと元老西園寺公望は、山本を奏薦したのと同じ理由、挙国一致内閣をつくらせて来る総選挙を公正に行わせたいという理由で、枢密院議長（枢相）の清浦奎吾（1850・嘉永3.2.14～1942・昭和17.11.5）を推し、元老松方正義（1835・天保6.2.25～1924・大正13.7.2）もこれに同意した。西園寺は当時清浦が政友会を尊重し、政友会もまた政策の面で清浦の内閣を助けることを希望していた。しかし清浦が貴族院の諸派を基礎とした超然内閣（第㉓代清浦内閣）を組織する（1924・大正13.1.7）と、世上には囂々たる非難の声があがり、そのなかで、新内閣に対する態度を回って政友会は分裂し、新内閣支持を唱えるものは新たに政友本党を組織（1月29日）し、政友会は憲政会、革新倶楽部とともに、いわゆる護憲運動（第2次）を開始して、清浦内閣の打倒へ進むことになった。この頃でも西園寺は、今や必至となった総選挙の結果憲政会が勝利を獲て大勢の上から加藤高明を奏薦しなければならなくなることに、あるいはまた憲政会の参加した連立内閣の生まれることを甚だ惧れていた（岡義武・林茂校訂「大正デモクラシー期の政治—松本剛吉政治日誌」1959・昭和34年、295頁）。

註 岡義武「近代日本の政治家」1960・昭和35年、文芸春秋新社、220—1頁

2. 元老園公、加藤（高明）を奏薦、松公は奉答辞退〔㉔加藤内閣成立

ところで、つづく総選挙（第15回臨時、1924・大正13.5.10）では政友会、憲政会、革新倶楽部といういわゆる護憲3派が合計で過半数を制し、かつ憲政会が第1党にのぼり、つづいて清浦内閣は総辞職した（1924・大正13.6.7、なお在任期間には次の内閣成立時の前までを含めて5カ月余ということになる。以下同じ）。

選挙の結果を知った後も、西園寺はなお考慮を重ねていた。しかし、中間内閣を組織するにも適任者を見出すことができず、彼はついに意を決して憲政会

総裁加藤高明（1860・安政7.1.3～1926・大正15.1.28）を奏薦した。なお、当時いま一人の元老松方は重病のため後継首班の下問に答えることを辞退したので、西園寺は内大臣平田東助（1849・嘉永2.3.3～1925・大正4.4.14、1922・大正11.9.18から1925・大正14.3.30まで内大臣）へもこの際御下問あるよう奏上し、ついで平田も加藤を奏薦したので、ここに加藤にたいして組閣の勅命が与えられた（岡義武「転換期の大正」日本近代史大系第5巻、1969・昭和44年、東京大学出版会、231頁）。こうして、加藤高明を首相とする護憲3派の連立内閣（第29代第1次加藤内閣）が成立した（1924・大正13.6.11）。そしてその翌月松方は歿したので、当時75才に近かった西園寺公望（1849・嘉永2.10.23～1940・昭和15.11.24）はついに唯一人の元老となった。

元老の役割は、1891・明治24年5月6日発足の第4代第1次松方正義内閣を成立させて以来、「内閣の製造者 (cabinet-maker)」・「内閣の後見人」として慣習的に定着してきた。外界からのあらゆる働きかけに対して生来自己を守って動かされまいとする西園寺は、唯一の元老としてその巨大な政治的責任を今後果たそうとする、したがってその場合に彼にとっては彼の全人格が常に賭けられることになった。

第1次加藤内閣の下で、西園寺は、加藤の手際を拙劣であるとし、また政党党首に依然人材の乏しいことを歎息した。そして将来の政変の場合、事情によっては中間内閣をも考慮しなければならないと考えたりした。また田中義一（予備役）陸軍大将（1863・文久3.6.22～1929・昭和4.9.28、長州藩士出身）を総裁に戴くことになった（1925・大正14.4.13、政友会第4代総裁に就任）政友会が次期政權を狙って政友本党との提携を画策しているのを見て、苦笑した。

註 前掲「近代日本の政治家」221～2頁

3. 元老、再び加藤を奏薦〔㊟加藤第2次内閣成立

ついで、政友会、憲政会両党の疎隔が烈しくなり、ついに第1次加藤内閣が閣内不統一のため総辞職を行う（1925・大正14.7.31、在任期間1年1ヵ月余）と、政友会と政友本党とは時を移さず両党提携の成立を世上に発表して次期政權を

期待したが、元老西園寺は、このような策動を無視して、加藤高明を奏薦し、第29代第2次加藤内閣が憲政会単独内閣として成立（1925・大正14.8.2）し、従来野党であった政友本党とむすんで衆議院の多数を制した。

註 前掲「近代日本の政治家」222頁

4. 元老、若槻を奏薦〔29若槻内閣成立〕

1926・大正15年1月28日に加藤首相が病死し、内閣が総辞職する（在任期間5ヵ月）と、翌日憲政会は直ちに若槻礼次郎を後任総裁に推戴した。元老西園寺としては第2次加藤内閣の政策がまだ行き詰まっていないと考え、また1921・大正10年11月4日に原敬首相が刺殺された際の先例をも考慮して、若槻礼次郎（1865・元治2.2.5～1949・昭和24.11.20、第1次・第2次加藤内閣の内務大臣、第2次加藤内閣の総理大臣臨時代理、総理大臣臨時兼任）を奏薦し、ここに第29代第1次若槻憲政党内閣が成立した（1926・大正15.1.30）。しかし、西園寺は、若槻を評価しては、後には到底首相の器ではないと松本剛吉に洩らしたりした。政党に人材を見出しがたく思う彼の念頭からは依然中間内閣のことが消えなかった。

ところで、若槻憲政会内閣は、政友本党と提携して施政にあたることを試みたが、政友会と政友本党とは政権獲得を焦り、大正天皇（1879・明治12.8.31～1926・大正15.12.25、第123代の天皇、1921・大正10年11月から皇太子裕仁親王—今上天皇—を摂政に任じた）崩御後、再開された第52回帝國議会には、政友会と政友本党とはついに政府不信任案を提出した（1927・昭和2.1.20）ので、議会はここに解散されると思われたが、若槻首相は議会停会を奏請した上で、田中義一政友会総裁、床次竹二郎政友本党総裁と会見し、新帝即位^{ひろひと}忽忽^{そうそう}の今日政争をかもすことを避けたいと述べ、これに対して田中・床次は不信任案提出にいたった事情について政府の側でも「深甚の考慮」を払うよう要望し、若槻は諒承すると答えた。そこで田中・床次は若槻内閣の早期退陣の約束を獲たものと考えて、朴烈問題や大阪松島遊廓疑獄事件に関する内閣不信任案を撤回した。この3党首の妥協は、世上を啞然たらしめた。当時元老西園寺は、解散によって政局の打開されることを期待しては、若槻首相が議会を停会して解散回避に

着手したことを聞き、このようなことになるのも政治家の質の低下したためだ、しかし、責任の一半は、「水準の低い国民」にもあるだろう、「ああ、これでまた当分、低級下劣な政争を繰り返して行くのか」と秘書原田熊雄にむかって嘆息した（原田熊雄『陶庵公清話』1943・昭和18年、101～2頁）。そして、その後も中間内閣のことを考えつづけた。

註 前掲「近代日本の政治家」222～223頁

5. 元老、田中を奏薦〔㉗田中内閣成立

3 党首妥協から幾許もなくして、第1次若槻内閣は、枢密院御前会議が、金融恐慌の対策たる台湾銀行救済緊急勅令案等を否決したことによって、総辞職（1927・昭和2.4.17、在任期間1年2ヵ月余）におこまれた。このとき、元老西園寺は、野党の政友会総裁田中義一（1863・文久3.6.22～1929・昭和4.9.28）を後継首班に奏薦し、第㉗代田中・政友会内閣が成立した（1927・昭和2.4.20）。

ところが、田中内閣が成立した翌年（1928・昭和3.6.4）、奉天において張作霖爆死事件（当時、新聞は、満州某重大事件として報じただけであった）が勃発した。この事件は蒋介石の北伐にともなう中国統一運動の進展を背景に関東軍関係者によって計画されたものであり、それはのちの満州事変の歴史的序曲となるのである。この事件の真相が政府関係者の間でやがて明らかになるにつれて、政府、与党内では事件を闇に葬るべきであるとの意見が支配的になった。しかし、西園寺は犯人がわが国軍人であることが明瞭になった場合には断然処罰して軍紀を維持すべきであり、そうすることこそわが国の国際的信用を保つことになり、また長い眼で見れば中国にも好感を抱かせることになると信じ、「この事件だけは西園寺の生きている間はあやふやに済ませないぞ」と原田にむかって独り言のように呟いた（原田熊雄述、「西園寺公と政局」1950・昭和25～1956・昭和31年 第1巻 10頁）。

註 前掲「近代日本の政治家」223～4頁

6. 元老、浜口を奏薦〔②⑧浜口内閣成立〕

田中首相は元老西園寺に督促されて、天皇に謁し、「満州某重大事件」についてはわが国陸軍軍人が主謀者である疑いがあり調査中である旨を上奏した。けれども、陸軍部内では犯人を愛国者であると賞揚するものが多く、軍法会議で処断することには同意しようとしなかった。窮地に陥った田中は参内して、その後取調べの結果幸いにわが陸軍の中には犯人のいないことが判明した旨を奏上した。事件の真相をすでに知っておられた天皇は、この奏上に甚だしく不満を抱かれた。そしてこのことを鈴木貫太郎侍従長から伝え聞いたとき、田中はついに内閣総辞職を行った（1929・昭和4.7.2、在任期間2年2ヵ月余）。そのあと、元老西園寺の奏薦によって、野党の民政党（1927・昭和2.6.1、憲政会と政友本党とが合同して結成された）総裁 浜口 雄幸（1870・昭和3.4.1～1931・昭和6.8.26、第1次・第2次加藤高明内閣の大蔵大臣、若槻内閣の大蔵大臣→内務大臣）が後継内閣（第②⑧代浜口・民政党内閣）を組織した（1929・昭和4.7.2）。

この浜口内閣の下で、1930・昭和5年1月からロンドン海軍軍縮会議がひらかれることになった。当時、西園寺は原田に語って「パリ平和会議（1919・大正8年のヴェルサイユ講和会議）後の新機軸であった平和の促進とか人類の幸福とかいふ精神に立脚している今日、攻撃的の設備をしようといふ国は何所にもない、」……軍縮は「平和愛好の精神から来た人類幸福のために企図されたもの」であると思う、と云った（前掲「西園寺と政局」第1巻、88頁）。このような考えを抱いていた西園寺は、たとえ海軍側がどのようなことを主張した場合でも、首席全権委員若槻としては軍縮条約を断然成立させるよう切望した。そして、かつてのパリ講和会議での彼自身の心境を思い浮べたりした。さいわい、1930・昭和5年4月に軍縮条約は調印の運びとなった。

その後、この条約が枢密院に諮詢されると、枢密院は、この条約の内容に烈しい不満を抱いていた海軍軍令部（1930・昭和5.6.10、加藤寛治軍令部長は、軍縮条約調印を遺憾とし、単独上奏して辞職した）と連絡をとって浜口内閣を烈しく論難し、政友会もまた、枢密院と策応して、内閣打倒の氣勢を揚げた。西園寺はこの有様をみて、海軍年来の横暴に対しては与・野党の別を越え提携して当るべ

元老西園寺公望と政権の推移（永井）

きところ、野党たる政友会が政権欲に駆られて軍部を利用する（第58回特別帝国議会では統帥権論争の末、大混乱起る）のは危険で心配に堪えない、と原田にむかって歎息した（前掲「西園寺と政局」第1巻 210頁）。

註 前掲「近代日本の政治家」224～5頁

7. 元老、再び若槻を奏薦〔㊟若槻第2次内閣成立

1930・昭和5年11月14日 浜口首相が右翼（愛国社）の一青年に狙撃されて重傷を負い、これが因でやがて内閣総辞職を行い（1931・昭和6.4.13、在任期間1年9ヵ月）、同時に民政党総裁の地位を若槻礼次郎に譲った。元老西園寺はこのときも、原敬、加藤高明のときの先例に従って若槻を後継首相に奏薦し、ここに第㊟代第2次若槻・民政党内閣が成立した（1931・昭和6.4.14）。

第2次若槻内閣が成立してから約5ヵ月を経た1931・昭和6年9月18日、満州で柳条溝事件が勃発することとなった。さきに、田中内閣下の張作霖爆死事件（1928・昭和3.6.4）、浜口内閣下の、陸軍中堅将校による秘密結社桜会の結成（1930・昭和5年9月）および3月事件（1931・昭和6年3月、未遂）などに象徴される、軍部を中核としたファシズムの波のうねりは、今ついに満州事変を生み出し、その翌月、国内においては10月事件とよばれる陸軍少壮将校によるクーデタ計画が未然に発覚し、密かに処理された。

註 前掲「近代日本の政治家」226～7頁

8. 元老、犬養を奏薦〔㊟犬養内閣成立

柳条溝における満鉄線路爆破事件を契機として、わが関東軍は予ての計画に従って軍事行動を迅速に満州で展開した。これに対して若槻内閣は不拡大方針をもって局面を收拾しようと試みたが、軍部を抑えきれず、狼狽・困惑した若槻首相はその苦衷を元老西園寺に徒に訴えるばかりであった。

このような中で、1931・昭和6年12月11日第2次若槻内閣は閣内不統一のため総辞職する。翌12日午後3時駿河台の自邸を出て坂下門より参内した元老西

園寺は、まず内大臣府において牧野伸顕内大臣（内府）ならびに鈴木貫太郎侍従長と会見、（野党の）犬養毅政友会総裁を奏薦するとしてもこの時局に対して特別の考慮を払うよう何分の注意を喚起する必要ありということに意見（が）一致した。かくして西園寺公（爵）は午後4時半天皇陛下に拝謁を仰付けられ、時局の重大性に鑑みこの際適任とすべきものを奏薦するについて、さらに熟考して奉答申上げたい旨を奏上し、種々有難き御言葉を賜って御前を退下し、再び牧野内府と会見し午後5時宮中を退下して駿河台の自邸に帰った（東京朝日新聞1931・昭和6.12.12）。

この時、天皇は、軍部の不統制、横暴、政治干渉を強く論難され、「国家のためすこぶる憂慮すべき事態である。自分は深憂に堪へない。この自分の心配を心して、お前（西園寺）から充分犬養に含ましておいてくれ。そのうえで自分は犬養を呼ぼう」（前掲「西園寺と政局」第2巻、160頁）と仰せ出された（前例にはなかったことである）。自邸にもどった西園寺は犬養を招いて、天皇の御意志を伝え、新内閣としては軍部の専横の是正に力を尽すよう要望するとともに、彼の政権構想を聴いた。当時政友会は171名で民政党246名に比しはるかに劣勢であったが、犬養の返答は断乎「単独政権」論であった。西園寺もその決意に賛同し、「両者の意見一致し、犬養は会見30分にして辞去した。犬養総裁辞去後、午後6時20分鈴木侍従長は西園寺公邸を訪問、公は犬養氏との会見内容を紹介し、さらに後継内閣の首班として犬養氏を奏薦する旨、侍従長を経て奉答方依頼するところ（が）あった」（東京朝日新聞1931・昭和6.12.12）

かくて、1931・昭和6年12月13日、第^{つよし}30代犬養毅（1855・安政2.4.20～1932・昭和7.5.15、政党政治家、立憲改進党→進歩党→憲政党→憲政本党→立憲国民党→革新倶楽部→政友会に所属、第1次大隈内閣で尾崎行雄のあとを受けて文相、第1次加藤高明内閣の通相、1929・昭和4.10.12第5代政友会総裁となる）・政友会内閣の成立をみて、憲政の常道は確保された。ところがほどなく桜田門事件と呼ばれる天皇暗殺未遂事件が突発（1932・昭和7.1.8）して、犬養内閣は総辞職したが、元老西園寺は、この場合も突発の不祥事による政権の移動を排除するため犬養首相に優諒を賜わるように事を運んで、内閣を延命させた。やがて2月20日の第18回臨時衆議院総選挙の結果、政友会304（133増）、民政党147（99減）となり、両党は完全に

立場を替えるが、井上準之助（1869・明治2.3.25～1932・昭和7.2.9、日本銀行総裁を経て、第2次山本内閣の蔵相、再び日銀総裁、浜口内閣、第2次若槻内閣の蔵相、民政党総務兼選挙委員長）が暗殺された（2月9日）のも、この総選挙のときである。それからほどなく団琢磨（1858・安政5.8.1～1932・昭和7.3.5、1914・大正3年三井合名理事長）も暗殺された（3月5日）、ともにいわゆる血盟団事件である。

ところで、この犬養内閣も亦、軍部を抑えることが容易に出来ず、軍部は満州の建国（1932・昭和7.3.1）を、ついで清朝宣統廃帝溥儀の満州国執政就任を実現させる有様であった。

註 前掲「近代日本の政治家」227頁

松山治郎「近代日本政治史」1972年・昭和47年、白桃書房、197～8頁

9. 元老、内府・枢相・その他の重臣に諮り、齋藤を奏薦〔①齋藤内閣成立
84才の西園寺が、陸軍の跋扈について憂慮される天皇を慰めるため、興津から上京（1932・昭和7.3.5）、参内（3月14日）してから2カ月の後、5・15事件が勃発した。そして犬養首相は白昼の首相官邸で制服の海軍青年将校らのピストルで射殺された。犬養内閣は臨時首相兼任の高橋是清のもとで、翌16日（1932・昭和7.3.16、在任期間5カ月余）総辞職した。

この椿事が起ると、元老西園寺は後継首班の御下問に奉答するため興津から上京した。鉄道沿線各駅の警戒は嚴重をきわめ、物々しかった。5・15事件はこれまで青年将校の間で種々計画されたクーデタ計画が実行に移されたものであり、また軍部内ではかねてから腐敗した既成政党および政党内閣を排撃する空気が強かった。

これよりさき、近衛文麿は、5・15事件の直後上京前の西園寺を興津に訪ね、この際においてとるべき途は二つあり、一つは後継首班を政友会から出し、政党政治、議会政治をあくまで守ることである。なお一つは甚だ危険ではあるが、思い切って軍部に責任をとらせることであり、そうすれば軍部もこれまでのように「政府外の政府」として政治を制御することもなくなり、しかも、軍部が政治に対して全面的に責任を負えば、結局は必ず失敗し、「軍の政治的立場」も清算されることになると述べた（近衛は後者の策に比重をおいていた

と考えられる）が、西園寺は黙聴しただけだった（岡義武「近衛文麿」1972・昭和47年、岩波書店、34頁）。

天皇は、後継首班を西園寺に下問された際、とくに鈴木侍従長を通じ「首相は人格の立派なるもの、陸海軍の軍紀を振肅するは一にかかって首相の人格如何による。協力内閣、単独内閣等は敢へて問ふところにあらず。ファッションに近きものは絶対に不可なり。憲法を擁護せざるべからず。然らざれば明治天皇（1852・嘉永5.9.22～1912・明治45.7.30、122代の天皇）に相濟まず、外交は国際平和を基礎とし、国際関係の円滑に努むること」（前掲、「西園寺公と政局」第2巻228頁）と伝達された。これまでに例のないことだった。

上京した西園寺は、3日間にわたって、高橋是清首相代理、倉富勇三郎枢密院議長、牧野伸顕内大臣と協議を行うとともに、山本権兵衛・清浦奎吾・若槻礼次郎の総理大臣前官礼遇者、上原 勇作・東郷 平八郎 両元帥の来邸を求めて（なお、山本はお上の思召でなければと来邸せず）、それぞれ意見を聞いたうえ、5月22日にはさらに牧野内府の来訪を求めて、「意見の交換を為した結果、国家非常時に際し挙国一致内閣の実現を企図する事が適当ということ」に一致したので、西園寺公は同日午後1時半参内、後継内閣組織に関する御下問に対し、謹んで斎藤実子爵を最適任と料する旨を奏上した（東京朝日新聞1932・昭和7.5.22日附夕刊）。かくて退役海軍大将 齋藤実^{まこと}（1858・安政5.10.27～1936・昭和11.2.26、1906・明治39年から1914・大正3年まで、第1次西園寺、第2次桂、第2次西園寺、第3次桂、第1次山本各内閣の海軍大臣、1919・大正8年～27・昭和2年、29・昭和4年～31・昭和6年朝鮮総督）の第㉑代内閣が成立した（1932・昭和7.5.26）。

政党さえしっかりしておれば、西園寺は政党内閣を拒むものではなかったし、これを育てたいと考えていた、この意味で「西園寺公の主義は政党内閣制にあった。しかし、国民の信頼を欠いている政党に政權を担当させれば、軍部との摩擦はいよいよ大きくなる。しかし、もしも軍部に政權を与えれば、どんな「過激」な方向に走るか予測しえない、とし、そこで中間内閣が最もよいと判断されたのである（前掲「近衛文麿」34頁）。西園寺公の考えでは、中間内閣の使命は、結局軍に引張られるが、他面軍に対して極力ブレーキを掛け、ブレーキを掛けてもなお四囲の情勢からやむを得ない場合に譲歩する。譲歩して

も、その結果が実際に現れることを出来るだけ先に延ばすやうにする。更に譲歩することによって生ずべき種々の危険も亦最少限に止める」ということであつた（近衛文麿「第1次近衛内閣、支那事変及大政翼賛会設立に就て」—『失はれし政治』1946・昭和21年所収、1—3頁）。

ところで、すでに1931・昭和6年1月、貴族院副議長にえらばれていた近衛文麿（当時39才）は、陸軍において皇道派とよばれることになったひとびとや、右翼では皇道派と親しいいわゆる観念右翼（平沼騏一郎以下の）ととくに密接な交渉をもち、わが国が満州事変を起したことを積極的に肯定したり、西園寺のこの中間内閣論に対しても甚だ批判的であつた（前掲「近衛文麿」26～31・35頁）。そこで、とくに家門の関係もあつて、近衛の身の上を配慮し後見役のような心持を、1919・大正8年のパリ平和会議全権団派遣（西園寺は首席全権、近衛は全権団随員）以来親しくもちつづけてきた西園寺は、世上のいわゆる革新陣営の側に大きく傾くにいたつた近衛を、なるべく早く貴族院議長にして、しばらくの間いろいろな（政治）運動の埒外におくことがよいと、1932・昭和7年3月以来考えつづけていたが、この齋藤内閣のもとで、1933・昭和8年6月になって近衛の貴族院議長就任は実現をみた。過去30年にわたりその地位にいた徳川家達いよさかが辞任したからである（前掲「近衛文麿」33・36頁）。

これよりさき、「木戸幸一日記」1932・昭和7年2月26日の条によれば、西園寺は近衛にむかつて、近來の政治情勢は自分の期待とは正反対の方向にむかっている。将来政変の場合に軍人を後継首班に奏請するようなことは自分として到底忍びがたい。そこで、今の中に慎重に考えて決意しなければ耻を後世に残すことにならう。それ故この際、元老としての優遇、栄爵を拝辞したいとも思っていると語つたが、この齋藤内閣が成立した年（1932・昭和7）の暮れにも、西園寺は、興津坐漁莊を訪れた内大臣秘書官長木戸幸一に対して、元老拝辞の希望を述べた。しかしそれをあくまで固執することは、国政が余りにも重大な局面にあつたので、このときも亦、西園寺は断行し得なかつた。

しかも、彼が元老の地位にとどまっているかぎりには、押し寄せるファシズムの怒濤に対して彼としてはあくまで抵抗を試みるしかなかつた。それ故に、1934・昭和9年4月に齋藤首相が興津を訪ねて、人心転換のためこの際辞めた

い（後任には近衛を前掲「近衛文麿」37頁）と述べたとき、西園寺はそれに耳をかさなかった。「とにかくこの際一層一つ御奮発願いたい」と頭ごなしに云い、齋藤を思い止まらせた。

その後、倉富勇三郎枢相が辞表を提出したが、そのとき齋藤首相は副議長の平沼騏一郎の昇任を考えた。しかし西園寺は、平沼をしりぞけて、前宮相一木喜徳郎（1867・慶応3.4.4～1944・昭和19.12.17）を推し、ついで一木を招いて国家に殉ずる決心で引受けよと語気烈しく迫って受諾させた（一木の枢相就任期間は、1934・昭和9.5.3～1936・昭和11.3.13）。西園寺は、右翼団体と密接な関係を持ち軍部とも親しい平沼を枢相の要職につけることは、政界上層部にフェシズムを導入する糸口をひらくものとみて、断乎阻止すべきであるとしたのである。

しかしこの齋藤内閣のもとで、わが国は国際連盟から脱退（1933・昭和8.3.27）し、西園寺を歎息させた。

註 前掲「近代日本の政治家」228～230頁

10. 元老、内府・枢相を含む重臣会議に諮り、岡田を奏薦〔㊸岡田内閣成立
1934・昭和9年7月3日、齋藤内閣はいわゆる帝人事件（実は平沼一派のファッショ的検事によるでっちあげであった）の責を引いて総辞職した（在任期間2年1ヵ月余）。暑中すぐれない健康をおして上京した元老西園寺は直ちに参内して、牧野伸顕内大臣、一木喜徳郎枢密院議長、総理大臣前宮礼遇者として、辞職した齋藤首相、高橋是清蔵相、若槻礼次郎、清浦奎吾を宮中に集めて意見を徴した（元老重臣会議）のち、齋藤が推し他の重臣が賛成した予備役海軍大将岡田啓介（1868・慶応4.1.20～1952・昭和27.10.17、1927・昭和2年田中内閣の海相）を奏薦した。第㊸代岡田内閣は、1934・昭和9年7月8日成立したが、前内閣と同じ中間内閣であった。西園寺がこのとき岡田を奏薦したのは齋藤を奏薦したときと同様の考慮による。

西園寺は齋藤内閣下で政党側が軍部に秋波を送り、軍部に便乗して政権に接近しようとしている有様をかねてから甚だ苦々しく思っていた。そこで岡田組閣の際には、現在の政党政治家については綱紀問題に関してとかくの醜聞があ

る、立憲政は尊重しなければならないが、政党の質が悪いのだから政党に余り重きを置く必要はない、と岡田に伝えた。そして、その後も、政府は二度でも三度でも解散をやって所信を断行したらよい、と原田に語ったりした。

また岡田内閣成立後には、西園寺は木戸に「どうも打明（け）た話が、軍人に引摺られて行くことは当分まぬかれない様だね。無理をしてはいけなから、根本を誤らない様にして、悍馬を御する様に或程度は引摺られるのも止（む）を得ないだろう。而し困ったもの^{しか}だ」と洩らした。（前掲「近衛文麿」38頁）

ところで1935・昭和10年にはいると、一木枢密院議長と牧野内大臣とは、ともにその健康の関係で辞意を抱くようになった。しかし西園寺は軍部・右翼の勢力が宮中に波及し、わが国の内政および外交がついに彼らの意のままになることをいかにしても阻止したいと考え、そのような観点から内府・枢相という二つの重職の人事を極度に重要視し、この際異動をあくまで回避したいと考え、その留任を切望した。したがって西園寺は平沼の枢府議長昇格には依然強く反対して、一木枢相は翻意、留任することとなった。また当時重臣方面の一部には牧野内府の後任に近衛を推す意見もあったが、西園寺は近衛と軍部・右翼との在来の関係から彼を内府に据えることには全く消極的であった、結局、牧野は辞任したが、齋藤実がその後を襲った（1935・昭和10.12.26）。（前掲「近衛文麿」44頁）

しかし、岡田内閣のもとで、わが国はワシントン海軍軍縮条約の破棄を通告した（1934・昭和9.12.29）。ついでロンドン海軍軍縮会議から脱退した（1936・昭和11.1.15）。国内においては11月事件（1934・昭和9年、未遂）、天皇機関説問題（1935・昭和10.2.18より）が起り、このような中で政治に対する軍部の圧力は上昇の一途を辿っていた。

註 前掲「近代日本の政治家」231～2頁

11. 元老、枢相・宮相に諮り、近衛を奏薦、近衛大命を拝辞

元老、改めて枢相に諮り、広田を奏薦〔◎広田内閣成立

そして、1936・昭和11年に入ると、2・26事件の勃発となった。この陸軍皇道派の叛乱の際には、元老西園寺も「君側の奸」として主謀者の暗殺リストに

上っており、叛乱直前に計画が変更されたため、襲撃を免れたのであった。当時天皇はこの騒擾を一方ならず激憤され、速かに「暴徒」を鎮圧せよと関係者（事件当日 辞表奉呈のため参内した首相臨時代理の後藤文夫内務大臣や、本庄繁侍従武官長、川島義之陸相）に烈しく督促された。しかも、内大臣斎藤実は暗殺され、侍従長鈴木貫太郎は重傷を負って出仕できず、天皇には側近を欠く状態であった。このような中で天皇は元老西園寺に対し、後継内閣について協議したいから速かに上京するよう命ぜられた。西園寺は健康を害していたので、叛乱が鎮定（2月29日）された直後（3月2日）に、嚴重な警戒の中を入京し、直ちに参内して、後継首班奏薦の勅命をうけたが、その後、西園寺は原田に語って、自分は良心に従って奏薦する以外に途はない。そうであるとすれば、近衛を推すほかはないと思うといい、原田の意見を尋ねた。原田は答えて、近衛の健康には多少の懸念もある、しかし、真崎甚三郎・荒木貞夫（皇道派一筆者註）は目下世上からは叛軍側の人物のようにみられており、陸軍部内でのその勢力もまた曾ってのようではない、それに故に、この際近衛が組閣しても彼と軍部との親近関係にもとづく危険性は以前よりは少いと思われる、ただ、余程しっかりした者をつけないといけなく、しかし、本人もその辺のことはよく考えると思う、と述べた。2・26事件は西園寺にも巨大な衝撃を及ぼし、これまでの考えを変えさせたものと思われる。すなわち、西園寺は事態が軍部による全面的な政治支配に進展するのをいささかでも抑止したいと考え、これまでは〈軍部・右翼に前々から人望のある〉近衛に危惧の念を抱いて来た西園寺も、ここに一転して、近衛を軍部・右翼に対する関係で、弱いが、しかし、最後の切札として起用しようとするにいたったのである。近衛家と皇室との間古く且つ深い縁故、近衛の良識への期待が、そう考えさせたのであろう。なお、当時このような望みを近衛にかけたものは、重臣方面にもあり、西園寺だけではなかった。（前掲「近衛文磨」44～5頁）

そこで、西園寺はまず近衛を招き、貴下は陸海軍にも政界・財界にも受けがよい、貴下を措いては何人も時局を收拾できないと述べて、組閣するよう求めた。近衛は、健康を理由に辞退し、また述べて、諸方面に受けがよいということはどこにも真の支持者がないということである。この際強力な支持なくして

は到底時局を收拾できないといい、ひたすら固辞して、西園寺の熱心な説得にもついに応じなかった。近衛との会見後、西園寺は原田と木戸内府書記官長とを呼び、近衛は健康のことをいろいろいっているが自分としてはやはり近衛を奏薦しようと思う。近衛が受けるか否かは別問題であると真剣な態度で語った。

そのあと西園寺は天皇に謁して近衛を後継首班に推し、今日のところ近衛以外には適任者はない旨を併せ奏上した。そこで、天皇は近衛を召し「ぜひとも」（このお言葉は異例のことである）組閣するようにといわれた。近衛はしばらく考慮の時間を頂きたいと述べて、一旦御前を退いた、御前退出後、木戸も組閣を勧めたが、近衛は依然健康を理由に拒み、木戸が万一再度組閣の勅命があった場合はどうするかと尋ねたのに対し、近衛はその際は栄爵を拝辞するほかはない、と答えた。ついで、近衛は西園寺に再び会い、健康を理由に勅命を辞退したい旨を述べ、そのあと拝謁して右の旨を奏上した（前掲「近衛文麿」45—6頁）。近衛家の当主であればこそ許されたわがままであろう。

西園寺老公としては、後継首班の奏薦に関する前2回の例を破って、個別的に重臣の意見を徴するでもなく、重臣会議を開くこともなく、機構的に存在する枢相一木喜徳郎と宮相湯浅倉平（内府齋藤実は暗殺されていた）の2人だけを公式の相談相手として、独自の見解と責任とにおいて敢然近衛公を奏薦したのであったが、近衛が固辞したあと、一木枢相の推す前内閣の外相広田弘毅（1878・明治11.2.～1948・昭和23.12.23連合国軍事裁判で絞首刑、齋藤内閣で1933・昭和8年より外相、次の岡田内閣でも留任）を奏薦し、広田は陸相候補寺内寿一を通ずる軍の干渉に苦しみながら辛うじて組閣を完了した（1936・昭和11.3.9）。

第33代広田内閣は成立後も、常に軍の強い制肘の下に立たされ、とかく無力であった。当時西園寺は原田に云った、軍と衝突するつもりの内閣が出来なければ結局駄目だ、しかし、今日のところそのようなものはとてもできない。軍と衝突すれば、憲法なんか飛んで行ってしまふ。今でも半分ぐらゐる飛んでゐるんだから」やはり広田のやっているようにやるほかはないであろう（前掲「西園寺と政局」第5巻、156～7頁）。1936・昭和11年3月13日には、西園寺があればほど反対してきた平沼の枢密院議長への昇任が実現した。

また同年5月18日には、陸軍省官制および海軍省官制が改正公布された。付表のただ一行の改正で、軍部大臣を現役陸軍大・中將および現役海軍大・中將に限定する軍部大臣現役制の復活である。これで軍部は内閣に対して、結束して例えば陸軍大臣の辞任、後任 陸軍大臣をださないことで（それも、参謀総長・陸軍大臣・教育總監の陸軍三長官会議において慎重考慮して推薦された候補者は全部辞退されました、というような口実のもとで）、活殺自在の力をふるうことができるようになる。『日本的、ファシズムの中核たる軍部独裁は、この制度を最大限に活用することによって着々と進められていくのである。

軍部大臣現役武官専任制は、山県有朋元帥が設けたものである（第2次山県内閣治下の1900・明治33.5.19、陸海軍省 職員表で、陸海軍大臣は現役の大・中將、次官は現役の中・少將と限定した。軍部大臣現役武官制の法的確立である）が、第1次山本権兵衛内閣が苦心の結果、予備役の大・中將にひろげた（1913・大正2.6.13、陸海軍省官制改正により軍部大臣現役武官制は廃止された、もちろんこれに対しては軍部は対抗策をこうじ、陸軍部内では陸軍省（陸軍大臣）、参謀本部（参謀総長）、教育總監部（教育總監）の正式な協定規定たる「（陸軍）人事に関する省部覚書」（部外秘）を定め、「漸く旺盛を極めつつあった政党の勢力が、陸相を通じて、部内の人事行政に浸潤するが如きこと」のないようにするとの声明を出した。さらに、1918・大正7年9月に陸軍中將田中義一がはじめて原政友会内閣の陸軍大臣に就任したとき、陸軍大臣は前任者の陸軍大臣が推薦するという原則を立てて、これについて陸軍の大長老、元帥 山県有朋の承認を得ている、これは内部的にいうと、前任陸相の推薦者を三長官会議で承認し、これを後継内閣の首班たるものに示すということになり、これを慣行として、軍部は予備役軍部大臣制に対抗してきた、したがって、非現役者の軍部大臣就任者のみならず、当時に至っていた、ただ海軍大臣の場合、原・高橋・浜口首相らが臨時にその事務管理を行ったことがあっただけである）が、現実には非現役者が軍部大臣に就任したことはなかったものを、2・26事件直後に、軍部は現役制を復活しない限り肅軍を断行することはできない、と主張しはじめた。事件発生当時の10大將のうち、荒木、真崎ら7名が予備役に編入されたのであるが、かれらのうち皇道派領袖が陸相に返り咲くことを防ぐというのが当面の理由であったが（しかしこの軍部大臣現役制の23年ぶりの復活は、前述のように、軍部独裁の礎石たる意味をもって来る大問題でもあったのであるが）、この重大問題を、閣議はさしたる異論もなく、アッという間に賛

成してしまったのである。しかも元老西園寺も広田首相からの連絡に対して「どうせ陸相の言分をきかねばならんのなら、あっさりきくのがよかろう、と答えたという（加瀬俊一「日本外交の主役たち」1974・昭和49年文芸春秋KK. 63—4頁）。あれほど軍によるファシズム化、とくにその宮中への侵入に神経をつかっていた元老にしても、外相時代の軍に屈しない勇気を一木枢相に評価された首相にしても、肝心なところになるとミスをしており、ここぞというときにつめが足りないようである。

この年（1936・昭和11年）の夏、西園寺は、「近頃つくづくさう思ふ。種々やって見たけれど、結局人民の程度しかいかないものだね」と木戸に洩らした（「木戸日記」1936・昭和11.7.4）。また、「どうもなんと言っても、国民のレヴェルがこれなんだから、……まづ国民の政治教育を徹底させて結局国民のレヴェルを上げるよりしょうがあるまい」としきりに原田に語った（前掲「西園寺公と政局」第5巻、135頁）。政治の立直しを政治教育に期するほかはないというこの言葉は、当面の情勢に対して西園寺の抱いた挫折感の告白でもあった。

そして、政治教育の中で最も根幹をなすものは、政党政治・男女平等の普通選挙を通ずる実践教育だとするならば、西園寺のこの言葉は、いささか遅きに失したものと思われる。

さらにこの年（1936・昭和11.11.25）、陸軍の圧力をいくらか緩和させることによって、日独防共協定が調印され、日本は国際連盟脱退以後の「名誉ある孤立、を脱したかにみえたが、元老西園寺は、日本は「結局ドイツに利用されるばかりで、なんにも得るところはない」と言った（前掲「西園寺と政局」第5巻、1936・昭和11.11.22日の項）。

さらに、この年の暮に原田から近く政変になる惧れのあることを聞いた西園寺は、原田にいった、「近衛公爵はこの際よくない。結局やっぱりロボットに終るやうでは面白くない。当分誰が出ても結局ロボットかもしれんが、とにかく近衛はなお自重さしておいた方がよい。」（前掲「近衛文麿」49頁）

註 前掲「近代日本の政治家」232～4頁

12. 元老、内府に諮り、内府に託して、宇垣を奏薦〔宇垣内閣流産〕

1937・昭和12年1月、第70回帝国議会で政友会の浜田国松の行った軍部批判の演説は烈しい波瀾を生んだ。この演説に激昂した軍部は議會を解散して政党を反省させることを強硬に主張したが、これに対して閣内の意見は分裂し、ついに広田内閣は総辞職した（1937・昭和12.1.23、在任期間10カ月余）。

当時西園寺は病床にあったので、後継内閣首班の御下問の奉答につき特に湯浅倉平内大臣の御差遣方を乞うところがあった。かくして湯浅内府は西園寺の興津坐漁荘に差遣されることになったが、内府はその前にまず平沼枢府議長と重大協議を遂げるところがあった。かくして内府と会談した元老西園寺は内大臣自身の意向およびまたこれを通じて平沼枢相の見解をも諒知し、慎重熟慮を重ねた上、内大臣に託して御下問に奉答した（今回の場合、実際問題として内大臣の比重が著しく加わってきたことが、看取される）。

このようにして奏薦された宇垣一成（1868・慶応4.6.21～1956・昭和31.4.30、1924・大正13年清浦内閣の陸相となり、加藤高明内閣、若槻内閣にも留任、1931・昭和6.6.17より1936・昭和11.8.3まで朝鮮総督府長官）に対し組閣の大命が降下した（1937・昭和12.1.25）が、陸軍首脳部は陸相候補を出そうとせず、それによって彼らの好まない宇垣の組閣を阻止した。

万策つきた宇垣は、湯浅内府に対し、勅命で陸相をご指名願うことを要請した。しかし湯浅の返事は、「そう無理をなさらぬでもよいではないか。そういう無理をなさると血をみるような不祥事が起るかもしれぬ」（「宇垣一成日記2」1133頁）と冷たかった。宇垣は「これが最初で最後だと思ってやってきた。ピストルでも爆弾でも覚悟の上で……いやそんなことは起らぬと保証する。ぜひ執奏してもらいたい」とこたえたが、湯浅は「どうもそこまでお上^{かみ}をわずらわしては…」と執奏しなかった。組閣工作109時間、ついに宇垣は組閣を断念するが、宮廷官僚にしても、元老にしても最後まで支援することがなく、最終の詰めを欠いている。

註 前掲「近代日本政治史」227頁、 服部之總・入交好脩監修、日本近代史研究会編「近代日本人物政治史」下巻、1956・昭和31年、東洋経済新報社、230～1頁

13. 元老、内府に諮り、内府に託して、第1候補平沼、第2候補林と奏薦、

平沼辞退〔㊦林内閣成立〕

宇垣の組閣拝辞（1937・昭和12.1.29）ののち、元老西園寺は湯浅内府と協議ののち、あらためて、平沼 駘一郎 枢相を第1候補、陸軍大将 林銑十郎（1876・明治9.2.23～1943・昭和18.2.4、岡田内閣の陸相）を第2候補に推した。西園寺としては絶対許したくはなかった平沼内閣ではあったが、ここまできた以上は、一応順序として平沼に諮り、彼が受けぬ時は林大将を奏請する方針を湯浅内府に指示したのである。この間の事情を内府から打ちあけられた平沼は、このたびは辞退して林に協力することとなり、林に大命降下し、1937・昭和12年2月2日、第㊦代林内閣が成立した。

かつては、軍人を首相に奏請するがごときは到底忍びがたい、耻を後世に残したくないと激語した西園寺は、その後、海軍大将齋藤実（当時73才）を、ついで岡田啓介（当時66才）を首相に奏薦した。ただしそれらの場合には、開明・穩健な海軍軍人出身者の手で、政党と軍部との「中間内閣」をつくって、軍部を抑制させることが狙いであった。けれども今は、情勢に押されて、1936・昭和11年3月に予備役に編入されたばかりの陸軍大将 林銑十郎（当時60才）を奏請するまでに追い込まれたのである。とはいえ、西園寺はこの林に前二者の場合のような開明性を期待していたわけではない。林内閣成立後に、原田が、林首相も段々にものが判るようになって来ましたと云ったとき、西園寺は「なあに判りゃあせんよ。軍人なんか、国家のためとか、人類のためとかいふ風なことは、本当に判るもんぢゃない」と云い棄てた（前掲「西園寺公と政局」第5巻、264頁）。

そして、西園寺は後継首班の奏薦拝辞、元老の地位拝辞の意向を口にした（これで3度目）。これに対して、湯浅内府、木戸内府秘書官長らは、天皇の側近を切崩そうという外部の運動が存在している際に、西園寺公が宮中と関係をもっておられるからこそ相当持ち堪えて行くことができる、公が身を引かれた場合には、この点が甚だ危険になるとして、懸命に西園寺を慰留した。荒狂うファシズムの激浪に囲まれた天皇側近のひとびとはすでに88歳の高齢にある西

園寺をひたすら頼みとする有様であった。

結局、西園寺の意向を酌んで、今後政変の際には天皇は後継首班の奏薦を内大臣に命ぜられ、内大臣は元老西園寺と協議の上で奏薦することに改められた。

註 前掲「近代日本の政治家」234～5頁

14. 内府、枢相・元老に諮り、近衛を奏薦〔㉔近衛第1次内閣成立

政党不信の超然少数内閣、陸軍の傀儡でありかつ、観念右翼、平沼騏一郎のリモン内閣であった林内閣は、予算成立後の、食逃げ解散、かつ政党を懲らしめる意味での懲罰解散、を行ったが、その総選挙（第20回臨時衆議院総選挙、1937・昭和12.4.30）に惨敗して、その前途は早くも行詰り、次期首班のことが諸方面で問題にされるようになった。ところで、近衛は健康を理由として依然組閣の意志なく、そのような中で、湯浅内府、林首相、木戸内府秘書官長、原田（西園寺公秘書、男爵）、近衛貴族院議長らが、適当な次期首班候補を見出しえないあまり、林内閣の陸相杉山元を推す有様になったとき、そのことを原田からきいた西園寺は、再び近衛起用を考えることになった。西園寺からみれば、近衛は後継首班として充分信頼できるとは依然いえなかったものの、軍部抑制という観点においては、軍（中堅幕僚）にひきづられればなしの杉山に比較すれば、よりましであると考えたものと思われる、西園寺のこのような意向が明らかになったので、その意向を休して木戸が近衛を説得し、結局組閣を内諾させた（前掲「近衛文麿」51～2頁）。そこで、1937・昭和12年5月31日に林内閣が総辞職する（在任期間4ヵ月）と、湯浅内大臣は、平沼枢密院議長にはかり、さらに興津の元老西園寺と協議の上で、近衛文麿（1891・明治24.10.12～1945・昭和20.12.16自殺）を後継首班に奏薦し、ついで天皇は近衛に対して組閣を命ぜられ（大命降下）、第㉔代第1次近衛内閣は、1937・昭和12年6月4日に、軍、政党、財界、世上の人気と期待とをあつめて発足した。もっとも陸軍の干渉はその組閣着手とともに始まった、陸軍が新内閣の蔵相にするよう強く要望し近衛が内相に据えた馬場錠一の入閣問題は、その代表的な例であった。（前掲「近衛文麿」54頁）

ところで、近衛首相の主観的意図はどうであれ、彼の内閣は、陸軍に引摺られればなしで、この内閣のもとで、

- 1973・昭和12.7.7 蘆溝橋事件勃発
- “ “ 8.15 内閣、暴支膺懲を声明
- “ “ 9.2 北支事変を支那事変と改称
- “ “ 11.20 大本營設置、同時に大本營
- ・政府連絡會議を設置
- “ “ 12.13 南京占領

1938・昭和13.1.16 「国民政府を相手にせず」と近衛首相声明

- “ “ 4.1 国家総動員法の公布

というように、つぎつぎと、外に向つては、中国戦線の泥沼的拡大が、内に対してはファシズムの強化が、結果として招来されたのである。政治倫理は動機倫理ではなくまず結果倫理であることを考えれば、首相近衛の政治責任の何と重大であることか。

その後、汪兆銘工作が進展し、汪が重慶を脱出して1938・昭和13年12月20日ハノイに到着し、これに呼応する形で、善隣友好（中国の東亜新秩序建設への参加）・日中防共協定・経済提携を呼びかけた近衛首相談話が発表された（12月22日）。

ところで、木戸幸一（1889・明治22.7.18～、木戸孝允の孫、侯爵、1930・昭和5.10.28から1936・昭和11.6.13まで内大臣秘書官長、ついで宗秩寮総裁に転じたが、近衛首相を扶けるため入閣して、1937・昭和12.10.22から1938・昭和13.5.26まで文部大臣、1938・昭和13.1.11より厚生大臣を兼任、1938・昭和13.5.26より専任厚相となる）はこれまで幾度か近衛に直言して、辞職を思い止まらせて来たが、右の近衛声明の出された頃には、近衛を慰留することはもはや無意味だと考えるようになった。木戸は原田にいった。「近衛がどうもああ気力がない——露骨に言えば多少真剣味を欠いてをるやうなら、やっぱり代った方がよいと思ふ。あとはどうも平沼（騏一郎、枢相）よりしょうがないぢゃないか」。その頃、興津を訪れた原田から政変の他ない形勢であるとの報告をうけた西園寺は、いった。「まあどうも、なんと云っても、最初は近衛もいろんな力を持って来てなんとかして纏

め、それをまぎって自分が連れて行かう、といふ気持だったんだらうが、結局どうすることもできないでまあ乗せられて行くままに行った、といふやうな情況だ。これも時勢かもしれないが、一体 どうも何をしてをるんだか」といった。数日後にまた原田にいった。「とにかく近衛が総理になってから何を政治してをったんだか、自分にもちっとも判らない。どういふんだらうか……時勢だから已むを得ない。陛下に対してまことにお気の毒である。あれだけ陛下は判った方であられるだけ、まことに同情に堪へない」。同時にいった、「内大臣に対してもまことに気の毒だ。結局近衛にもまあ時勢がかういう風だから気の毒だ。まあなんとでもかういふ時勢である以上已むを得まい」。西園寺は早くから近衛を知り、彼としては近衛を庇護しながらその政治的大成を期待したのであった。しかし、以上の言葉でも示されているように、首相としての近衛は西園寺を失望させ、しかもその失望は今や大きかった（前掲「近衛文麿」100—1頁）。

15. 内府、元老に諮り、平沼を奏薦〔36平沼内閣成立

こうして、1939・昭和14年1月4日ついに近衛内閣は総辞職した。陸軍側は、汪兆銘がすでに行動を起しかつ近衛声明が発表された矢先に近衛が辞職することは甚だ好ましくないとして阻止しようと種々工作を試みたが、成功しなかった。陸軍は、世上の人氣が未だ全く失われるにいたっていない近衛に傀儡としての利用価値を認めていたのでもある。

近衛が総辞職すると、天皇は後継首班につき湯浅内府に下問、湯浅は興津に元老西園寺を訪い元老と協議の後、枢密院議長 平沼騏一郎（1867・慶応3.9.28～1952・昭和27.6.14、検事総長・大審院長を歴任、1923・大正12年に第2次山本内閣の法相、1924・大正13年枢密顧問官、1925・大正14年枢密院副議長、1936・昭和11年より枢密院議長）を奏薦した。後継首班奏請の形式は前回から内大臣が責任をもつこのような方式に改められていた。このとき、西園寺は平沼を、elastic（融通性がある）だからと評して、みずからを慰めた。第36代平沼内閣の組閣（1939・昭和14.1.5）とともに、近衛は代って枢相に就任したが、同時に新内閣の無任所大臣を兼ねることになった。汪兆銘に対する信義を考えた措置である（前掲「近代

日本の政治家」239頁、前掲「近衛文麿」104頁）。

16. 内府、枢相・元老に諮り、阿部を奏薦〔第97代阿部内閣成立〕

平沼内閣は前内閣以来の日独防共協定強化問題を取り上げたが、その外交交渉が難行し、遷延を重ねている中に独ソ不可侵条約の締結（1939・昭和14.8.23）が突如発表され、それを機会に、平沼は、ヨーロッパに「複雑怪奇なる新情勢」を生じたので、これまでと異なる政策の樹立を必要とするにいたったという理由の下に、内閣総辞職を行った（1939・昭和14.8.28、在任期間7カ月余）。

陸軍がドイツと呼応して防共協定の「強化」をいかにもして実現しようとし、しかも、独ソ不可侵条約の成立によってドイツに裏切られた形になったとき、西園寺は「有史以来の大失敗である」と評した（前掲「近代日本の政治家」239頁）。

そして、湯浅・西園寺らは、世上からいわゆる英米派とみられている池田成しげ彬あき（1867・慶応3.7.16～1950・昭和25.10.9、1909・明治42～1933・昭和8年三井銀行常務取締役、1934・昭和9～1936・昭和11年三井合名常務理事、1937・昭和12年日銀総裁）に組閣させて、これを機に外交の方向転換を行わせようとも考えた。しかし枢相近衛は反対して湯浅に「軍部が少ししまったと思ってる時、のしかかって親英派の巨頭を持って来るのは、どうも考へものであろう。……場合によっては血の雨までも覚悟しなければならぬとはどうか」といった。近衛は、独ソ不可侵条約以前から広田を次期首班に推していた。その理由は、広田の意見が陸軍に近いからやれるであろうということにあった。しかし、広田については陸軍部内に異論があり、陸軍は阿部信行または林銑十郎を後継首班として推すにいたった。このような中で、近衛は湯浅に対して池田の組閣に反対である旨を重ねて述べるとともに、（近衛自身の伝聞にもとづく異色人事癖がこの場合も出て）阿部に執着した（前掲「近衛文麿」105頁、前掲「近代日本政治史」234頁）。平沼内閣の総辞職（1939・昭和14.8.28、在任期間7カ月余）とともに、結局湯浅内府は元老西園寺の諒解をえて、阿部信行（1875・明治8.11.24～1953・昭和28.9.7、当時予備役陸軍大将）を奏薦した。

第97代阿部内閣の成立（1939・昭和14.8.30）直後、ヨーロッパではドイツ・ポ

ーランド戦争が勃発し、これを糸口として第2次世界戦争の開幕となった（9月3日）。阿部内閣は、ヨーロッパ戦争に介入せず、日支事変の解決に邁進する、と声明したが、具体的な政策をうち出すことが出来ず、また内政では、官僚内閣ぶりを發揮して、貿易省を設置しようとして外務省の猛反対の前に屈し、官吏身分保障制度撤廃案を出して枢密院に反対され、そのうえインフレの悪化に対処しえなかった。

17. 内府、枢相・その他の重臣・元老に諮り、米内を奏薦〔88米内内閣成立

1940・昭和15年1月、第75回帝国議会再会の日に276名の有志代議士署名の不信任決議を示された阿部首相は、解散を決意したが、選挙が反軍の機運を生む機会となることを恐れた軍部の意向を代表した畑俊六陸相の反対にあって、1940・昭和15年1月14日総辞職した（在任期間4ヵ月余）（松下芳男「日本軍閥の興亡」1975・昭和50年、芙蓉書房、526頁）。

阿部内閣の瓦解が予想されるにいたった頃、枢相近衛は後継首班として今度は熱心に池田を推すにいたった。理由は、阿部内閣の行詰りが経済政策にあるというにあった。ところが、陸軍は当時近衛の再出馬を要望し、池田の組閣には烈しく反対した。畑俊六陸相は近衛にむかって、池田の組閣に反対する部内の異論を抑えることは自分には微力で到底できない。もし池田に組閣させるならば、2・26事件のごとき事件が起りはしないかと憂慮している、と語った。しかし、近衛は、財政・経済に暗いことを理由に陸軍の要望を拒否した。湯浅内府も近衛に対して熱心に組閣を求めたが、近衛は陸軍に答えたのと同一の理由で固辞し、池田を推した。しかし湯浅は、今回はもはや池田の件をとり上げようとはしなかった（前掲「近衛文麿」106頁）。すなわち、いよいよ阿部内閣が総辞職すると、後継首班につき御下問をうけた湯浅内府は、個別に首相前官礼遇者の意見を聞き、詳しくいうと、岡田啓介・平沼騏一郎は宮中に招いて、若槻礼次郎（伊東に滞在中、電話が通じなかったので意見を求めず）・清浦奎吾（熱海で静養中）には電話で意見を聞き、さらに枢相近衛と会談し、最後に松平康昌内府秘書官長を興津の元老西園寺のもとへ派遣して諒解を得るという手続きをふ

んで、米内^{よない}光政（1880・明治13.3～1948・昭和23.4.20、1936・昭和11年連合艦隊司令長官、1937・昭和12年海軍大将、林、第1次近衛、平沼各内閣の海相）現役海軍大将を奏薦した。前阿部内閣の末期に、天皇が「米内はどうだろうか」と漏らされたのを心にとどめていた湯浅が、岡田に固辞する米内の説得を頼み、兩人の強い推薦で、ここに大方の予想を破って米内に大命が降下したのである。

米内および海軍上層部の多くが親英米派であり、かつその組閣は親英米派重臣を背景としたため、前の阿部「陸軍、内閣がだらしなかった面子にかけても再び陸軍内閣をと思っていた陸軍軍部は、初めから白眼視したが、天皇がとくに畑陸相を召されて、内閣に協力するようといわれたので、一応政局は安定し、第38代米内内閣は登足した（1940・昭和15.1.16）（前掲「日本軍閥の興亡」530頁、前掲「日本外交の主役たち」91頁）。

米内首相は有田八郎外相とともに慎重に構えて独伊とは友好を増進するが軍事同盟は絶対に避けるとの方針を堅持した。ところが、ヨーロッパ戦争におけるドイツ陸軍の急進（1940・昭和15年6月フランス降伏）で、陸軍は再び枢軸同盟の締結を強硬に主張しはじめ、「革新、官僚は有田排斥の火の手をあげた。他方、6月24日には、近衛は枢密院議長を辞任し、同時に新体制運動推進の決意を表明した（しかし、実のところは、この時になっても、近衛はまだ政治新体制についての具体的構想を何らもち合わせていなかったのである）。

18. 内府、枢相を含む重臣会議に諮り、再び近衛を奏薦、元老は奉答を辞退

〔39〕近衛第2次内閣成立

そしてついに、1940・昭和15年7月14日、従来は政府に協調的だった畑陸相が、突然内閣総辞職を要求した。軍主流は閑院宮載仁^{ことひと}参謀総長を動かし、善処せよとの指示を陸相に公文で伝達（異例のことである）したのである、外交方針の刷新が焦眉の急なのに、政府は徒に^{いたずら}機会を失しているから、新体制確立を促進するため退陣せよ、との趣旨だった。畑は苦慮したが不本意ながら従わざるを得なかった。米内は少しも騒がず、都合が悪ければ辞めて貰うと、畑に言い渡したが、案の定、陸軍は後任陸相を出さず、米内内閣は総辞職（1940・昭和15.7.16）においこまれた、在任半年だった。ところで、さきの新体制云々は、

近衛を中心とする革新的政治組織を指すが、その裏には再び近衛をかつぎ出そうとする軍の、近衛再登場の舞台づくりの意味があった（前掲「日本外交の主役たち」92頁）。

米内内閣総辞職の半月前（1940・昭和15.6.1）、軍に対してその硬骨を認められていた湯浅倉平（1874・明治7.2.1～1940・昭和15.12.24、内務官僚出、1933・昭和8年一木喜徳郎のあとを受けて宮内大臣、1936・昭和11.3.6に齋藤実のあとを受けて内大臣となる）は病のために内府を辞し、木戸幸一（1889・明治22.7.18～、侯爵）がそのあとを襲った。そこで米内内閣が瓦解して、天皇から後継首班につき御下問をうけた内府木戸は、重臣たちの意向を徴し、さらに元老とも協議した上奉答すべき旨を奏上した。ついで宮中に在京中の前総理大臣たる若槻（男爵）、岡田（海軍大将）、広田、林（陸軍大将）、近衛（公爵）、平沼（男爵）と、現枢相原嘉道の7氏による重臣会議をひらき、木戸は述べて、きくところによれば軍首脳部の方面では近衛公の出馬を望む空気がきわめて強いとのことである。陸軍がこのたび米内内閣を瓦解にいたらしめたのも近衛公の組閣を予定してのことと解すべきふしがある。他に適任者があるとも思われないので、この際是非とも近衛公の奮発を望みたいと述べ、近衛を除く重臣たちもこれに賛成した。この会議後、木戸は松平康昌内府秘書官長を興津に派遣して西園寺の意見を尋ねさせた。しかし、元老西園寺は自分は近来病気である上に政界の事情にうといたため責任をもって奉答しがたいと答えた。そこで、木戸は近衛を後継首班として推薦した。なお、松平が西園寺を訪ねる以前に、西園寺は原田から次期首班には近衛が就任せざるをえない情勢である旨をきいたが、西園寺はいった。「今頃人気で政治をやろうなんて、そんな時代遅れな考じゃあ駄目だね。」と消極的であった（前掲「西園寺公と政局」第8巻、291頁）。この頃の西園寺は、政治家としての近衛への信頼と期待とを失ってしまっていたように思われる（前掲「近衛文麿」118頁）。

1940・昭和15年7月22日、第99代**第2次近衛内閣**は発足した。天皇、木戸内府らの忠告をふりきって松岡洋右ようすけを外相に起用した近衛内閣は、1940・昭和15年7月27日の大本営・政府連絡会議で、大本営側の提案になる「世界情勢の推移に伴ふ時局処理要綱」を決定して、南進国策を正式に決め、まず北部仏印へ

進駐した（9月23日）。その4日後、ついに独伊両国との間の同盟条約に調印した（9月27日）。三国同盟には、天皇も深い不安を抱かれ、日米戦争を誘発せぬかと懸念され、「もう暫く独ソ関係をみきわめたくて、締結しても遅くないではないか」との事前のコメントもあった（近衛文麿手記、共同通信社編「近衛日記」179頁）。わざとその経過を知らされていなかった元老西園寺にとっては寝耳に水だったが、原田に、「やはり尊氏が勝ったね」と慨嘆した。尊氏とは軍部ことに陸軍軍閥のことであろう。（前掲「日本外交の主役たち」244頁）

同年10月12日には、かねての新体制運動は大政翼賛会の結成となって具体化されたが、綱領も宣言もなく、かつての（第1次近衛内閣下の）国民精神総動員運動と本質において異ならないものになろうとしていた（前掲「近衛文麿」134～5頁）。

満91歳になろうとしていた元老西園寺の心を圧していたのは、国の行末に対する限りないまでの憂いであった。イギリスの最後の勝利を信じていた西園寺は、三国同盟について「英米を向ふに廻したことは、外交の非常な失敗だ」と原田にしきりにいい、嘆息した。原田が10月初めに興津を訪れたとき、西園寺は近衛を評して、「近衛は道具立てのみに一生懸命で、実際の政治の仕事をやってをるかどうか」といった。「道具立て…」は、大政翼賛会設立の件を指したものであろう。その後、西園寺は、「近衛がもう少し敢然とやってくれるといいけれども、なんともいっても誰が出ようが、日本の陸軍がこんな風な状態で勢を振るってゐる時には、なんともしょうがない。まことに困ったものだ」と原田にむかい嘆息した（前掲「近衛文麿」135～6頁）。

翌11月に入ると、10・11の両日にわたって、建国2600年の祝典が、東京はじめ各地で賑々しく挙行されたが、日本の現実内外ともに暗澹たるものがあった。すなわち外^{そと}、日中戦争はすでに3年余にわたりながら未だに収拾されず、いままた大東亜共栄圏といういささか独善的な理念の建設を標榜し、三国軍事同盟を結んだわが国の前途は、きびしい国際情勢に直面しようとしていた。また内^{うち}にあっては、近衛の新体制推進声明（6月24日）以来、バスに乗り遅れるなど、第2次近衛内閣成立前後に、日本革新党（赤松克麿派）、社会大衆党（安部磯雄）をはじめとして、政友会・民政党ほか諸政党が次ぎ次ぎに解党し、その結

果、政界は無政党状態となり（しかもこの有様をみて近衛は当惑し、新体制樹立に対する当初の熱意を全くなくするのである「後藤隆之助氏談話速記録」（『内政史研究資料』1968・昭和43年、第66—69集、所収）160—1頁、昭和同人会編著「昭和研究会」1968・昭和43年、47、280—1頁）、立憲政はもはや奇形化し、また連年に及ぶ戦時経済の下で民衆は日常生活物資の不足にますます苦しみつつあった。

西園寺が興津の坐漁荘において病床についたのは、国内が、皇紀2600年記念祝典の作られたお祭り気分沸き立っていたなかであった、やがて腎盂炎で重態に陥った。11月13日の夜、興津を訪れた原田に主治医の勝沼精蔵は云った。「自分は何十年か公爵（西園寺）にお付きしているけれども、病気になられて、国事について自分にまでいんなことを言われたのは、今度が初めてだ。どうも内外の政情に対する心配が非常に公爵の身体に利いてるやうだ。『どうも新体制とか言って、国が二つ出来るやうなことぢゃあ困る』とか、『外交もどうもこれぢゃあ困る』とか、いんなことを独りで言っておられた。また、主治医勝沼は云った、なるべくいいことがあったら公爵にきかせて欲しい、それが「精神的の注射」になる。18日、原田は病床を見舞った。勝沼の過日の言葉もあったので、原田は、対米戦争をできるだけ回避するために政府、陸海軍の懇望で野村吉三郎大將が駐米大使として赴任することになったと報告した。西園寺は大変喜んだように見え、「本当に行くのかね」といい、「どうか野村に宜しく言ってくれ」と伝言した。そのあと、原田は、近衛首相が日中事変收拾のため目下蒋介石に対して非常な努力を試みていると述べたとき、西園寺は独り言のように云った、「蒋介石に関する限り、いまなんとしたって日本の言ふことなんかきくもんか」（前掲「近代日本の政治家」242～3頁）。

時局に対する西園寺の失望と憂愁とは、余りにも深く、病床の西園寺は、生に対する執着を全く失ってしまったように見え、主治医勝沼を嘆息させた。11月24日、夜、最後の元老西園寺は、糠雨に煙る坐漁荘に、数え92年の生涯を終った（前掲「近代日本の政治家」243頁）。「おい、顔のひげがのびたから剃ってくれ」というのが最後の言葉だった。（前掲「近代日本人物政治史」下巻、253頁）

結びにかえて

本文でも示したように、1937・昭和12年7月7日の蘆溝橋事件を端緒として日中戦争が開始されると、大日本帝国は一その激動期的状況におかれることとなった。

ところで、激動期には激動期にふさわしい宰相が必要となる。第1次大戦における、ロイド・ジョージ David. 1st Earl of Dufor Lloyd George (1863～1945、英首相1916～22、自由党首領)、クレマンソー Georges Clemenceau (1841～1929、仏首相1906～9、17～20)、第2次大戦におけるチャーチル Sir Winston Leonard Spencer Churchill (1874～1965、1939年海相を経て、1940～45首相兼国防相、1940～55保守党党首、51～55首相)、ルーズヴェルト Franklin Delano Roosevelt (1882～1945、米第32代大統領1933～45、民主党)の決然たる政治指導、不屈の意思や行動をみよ。そしてこれらの人人は究極するところ国民の意思、すなわち選挙を通じて出てきた政治家であった。

ところで、国民による総選挙とは全く関係なしに、枢相平沼、元老西園寺と協議した内府湯浅によって奏薦されたのち、天皇の大命降下によって、その座についたわが近衛首相はどうであったらうか。

近衛第1次内閣1カ年半の施政の間に、近衛はいくたび辞意を洩らしたことが。その著しい場合をあげただけでも7回は数えることができる。

第1例は、わが軍の杭州湾奇襲上陸(1937・昭和12.11.5)が成功してまもない頃大本営および大本営・政府連絡会議設置をめぐる軍部と政府とのいざこざのあと、杉山陸相から少数閣僚制を採用するよう進言されたとき(詳しくは、前掲「近衛文麿」75—7頁)。

第2例は、軍中央部が松井石根上海派遣軍司令官の意向に押されて、その進撃が南京をめざしてつづけられることになり(12月)、戦局が近衛の意向如何とは無関係に進展しつつあると思われたとき(詳しくは、前掲「近衛文麿」77—8頁)

第3例は、第73回臨時帝国議会に電力国家管理法案と国家総動員法案とを提出(1938・昭和13.2.24)したが、両法案をめぐる議会、世上に不穏な空気が流れてきたころ(詳しくは、前掲「近衛文麿」83—5頁)。

第4例は、第73議会閉会（1938・昭和13.3.27）直後に参内したときである。このとき近衛は「ただ空漠たる声望だけあって力のない自分のやうな者がいつまでも時局を担当するといふことは、甚だ困難なことでございます。やはり実力のある者に当らしめることが適当と存じます」と奏上し、さらに数日後には「どうもまるで自分のやうな者はほとんどマネキンガールみたやうなもので（軍部から）、何も知らされなくて引張って行かれるのでございますから、どうも困ったもので、まことに申訳ない次第でございます」と奏上する有様であった。

しかし、近衛の周辺では、次期首班に適当なものを見出しがたいままに近衛の留任を求める意見が甚だ強かった。西園寺も同様であった。西園寺は原田に、いま辞めるなどというのは「以ての外」で、健康が悪ければ場合によっては首相代理でも置いて充分静養すればよいではないか。自分ももう少し元気なら、「近衛の所に行って蔭ながら援けるなり、できるだけ尽力したい」ところである。もしも二、三適当でないと思う閣僚があるのなら、天皇のお許しをえて更迭すればよいではないか。大いに元気を出してやって欲しい。天皇からも近衛に対して辞めぬようにもう少し強く話されることが必要である。それを西園寺が希望しているということを貴下（原田）から内大臣に伝え、内大臣がそのことを天皇に奏上して欲しい、といった。原田は西園寺の以上の意向を近衛にも伝えた。近衛は一応翻意した。それは西園寺のこのような意向によるものように思われる（前掲「近衛文麿」85—6頁）。

しかし、近衛は依然無気力であり、そのような状態は、1938・昭和13年5月になっても変わらず、西園寺をして「近衛のやってゐる様子を見てをると、いかにも自分はなにか使用人みたやうな気持で働いてゐるやうで、もう少し国政にみずから任じてゐるといふ自信、自分が大政^{しよ}變理の任に当たっていると強ひ自信が欲しいやうに思はれる。さうしてみずから自主的に出て、もっと積極的に指導する気持が欲しいと思うが、どうもさういふところがない。いかにも奉公人のやうな気でやってゐるやうでは、とても駄目じゃないか。」と、興津へ政情報告にきた原田に対して云わせる始末であった。ところで近衛が一先ず翻意したあと、西園寺はあらためて原田にいった。近衛も、「もうなるべ

く好い時にやっぱり一度辞めた方がいいかしらん。他日を期する方が近衛のためになるかしらん。しかし、いい学問をしたな」（前掲「近衛文麿」86頁）。

第5例は、1938・昭和13年5月の内閣改造で、積極的に国民政府との和平を推進しようと、広田に代えて、宇垣一成^{かずしげ}を外相に迎えながら、陸軍提案の興亜院新設問題その他で近衛みずからが宇垣に積極的な支持を与えなかったため、宇垣外相が在任わずか4カ月で辞表を提出したときである。このときは、天皇、湯浅内府、原田、とりわけ木戸の説得で、ようやく近衛は翻意し、宇垣の後任に有田八郎を起用したが、近衛はもはや無気力、投げやりになり、退陣の機会をひそかにうかがう有様になった（前掲「近衛文麿」91—2頁）。

第6例は、漢口陥落（1938・昭和13.10.27）の直前である。依然辞意を抱いていた近衛は、漢口陥落直前、原田にいった、自分が今辞めると政変を起すことになって内外への影響は甚だよくないし、また「逃げ出した」という風にとられても困る。そこで、いろいろ考えたが、伝えきように内大臣（湯浅）がもし本当に辞めたいのなら、自分が内大臣に転任する。内大臣（湯浅）の辞めたあと、後任にはどうしても近衛が必要だという形になれば、後任首相には首席閣僚ということで米内海相^{よない}がなり、今の内閣をそのままつづけさせる。手際よく取り運ばれば、それが自分には一番望ましいが、どうであろうか。近衛のこのような意向を原田からきいた西園寺は、原田にいった。全く筋の立たない話ではないか。近衛内閣が…今日までつづいたということは、陸軍の支持があったからである。従って、もしも近衛を内大臣にして天皇の側近に置くならば、陸軍の勢力が宮中へも及んで来ることになる。これは甚だ困る。もはや政治も今日では陸軍のほとんど意のままになっているが、宮中だけはそうならないようにしたい。そこで、内大臣にだけ話してもらいたいが、近衛を今日内大臣にすることには自分は「絶対に反対」である。近衛がもし辞めたいのなら、「変な小細工」はせずに、後のことも考えて無責任という非難をうけないようにして、漢口攻略後にも適当な時機をみて「立派に堂々と」辞めたらよい。西園寺はこのように述べたあと、原田に、出所進退についての以上のような意見を近衛に伝えるよう依頼した。同時に内大臣へは、「非常に御苦勞だけれども、死ぬまでその職を離れてはならん。ぜひ御奉公しろ」と伝えて欲しい、と

いった。原田から西園寺の以上の伝言をきいた近衛は、これを諒承した（前掲「近衛文麿」92—3頁）。

しかし、指導力に乏しい近衛の下で、その内閣はもともとまとまりを欠きがちであったが、近衛が氣力を失って行くにつれて閣内の統一もいよいよ失われる有様になり、1938・昭和13年11月には、西園寺をして「どうも今の内閣は連邦のやうだね」と原田にむかって云わしめるようになる（前掲「近衛文麿」93頁）。

第7例は、1938・昭和13年12月にはいって、またしても近衛は木戸に辞意をもらすのである。そして木戸から、今日の時局における最大の責任者は160万の兵を海外に送っている陸相である。それ故、陸相の諒解をえずに辞職し、陸相を窮地に陥れるのはよろしくない。また汪兆銘の重慶脱出も迫っているように伝えられているので、この際わが政情が不安の観を呈するのは好ましくない、よって貴下の進退の件については陸相と懇談したいから一任してほしいと説かれ、近衛は結局同意したが、木戸から近衛の意向をきいた陸相（板垣）は、当然のことながら、この際の政変には絶対に反対であると主張した。そこで木戸は近衛と内閣の進退についてさらに協議したが、その際近衛は、1938・昭和13年初めから始まっていた日独防共協定強化問題のことを語り、同問題の関係（閣内意見の分裂）からも速かに辞職したい、と述べたのである（前掲「近衛文麿」97頁）。決断すべき問題が起るたびに、自ら決断することができなくて、それを回避するために、辞めたい辞めたいでは、まことに困ったものである。

右の7つの例ではっきりとわかるように、近衛は、全く、激動期にふさわしくない宰相だったのであって、これでは非常時局を乗り切れるものではなかった。しかるに当時全く真相を知らされていなかった国民は、統制されたジャーナリズムやラジオによって、事大主義的心理をかきたてられ、近衛を仰いで神秘的な期待すらいだっていたのである。

ところで、このような近衛がどうして首相の座に着くことになったのであろうか。内府が枢相および元老と協議ののち後継首班として奏薦したからである。元老の、ついで元老から譲り渡されるようになった内府の、後継首班奏薦権によって、奏薦されることが決め手となるのである。奏薦されれば大命降下となる。奏薦されない者に大命が降下することはない。そういう運営が行われ

ていたのである。

本文でもみたように、世上のいわゆる政党内閣時代といえども、衆議院で多数党の党首になったから、直ちに（途中に「君主の任命」のような手続きが必要であったとしても、それが全く形式的なものになってしまっていて）、首相になれる国や時代とはわけが違っていたのである。

最期まで政党内閣制を認めようとはせず勤王党という疑似政党を含んだ3党制によって政府が衆議院を操縦することしか念頭になかった元老山県有朋（1838・天保9.4.22～1911・大正11.2.1、1回目の内閣総理大臣をおえて、1891・明治24.5.6に、明治天皇から元勲優遇の詔勅を下賜されていわゆる元老一慣習的呼称一となる）が生きていた間は、時代の「大勢」で原敬の政友会内閣を認めなければならないようになって、多数党の党首（総裁）だから、後継首班（次期内閣総理大臣候補）として奏薦（天皇に推薦）するのではなくて、天皇の国政を輔弼するにふさわしい人物だから奏薦するるのであるという理くつがつけられていたのである。

若くしてフランス文化の洗礼を受けた元老西園寺公望（1849・嘉永2.10.23～1940・昭和15.11.25、二度の内閣総理大臣を終えて、1912・大正元.12.21の大正天皇の詔勅をうけ、1913・大正2年2月桂第3次内閣の瓦解後元老間の協議に参加し、爾来元老の一人に加えられる）の場合には、そのような理由づけは必要でなかっただろうけれども、政党内閣制の樹立を望んでいた彼にしたところで、すでに本文でみてきたように、彼の目からみた政党の低迷の故に、中間内閣のことが常に彼の念頭から去らなかつたのである。

元老西園寺が後継首班を奏薦するときの匙加減ひとつでくずれ去る程度の政党内閣が、第⑳代加藤高明内閣から第㉑代犬養毅内閣まで、1924・大正13年6月11日より1932・昭和7年5月16日（犬養内閣総辞職）までせいぜい8年間続いたに過ぎない。本稿でとくに「日本的、政党内閣とよんだ一半の理由はここにあるのである。なおまたそれが慣習としてであっても法制としてであっても一貫して軍部大臣武官制が行われてきたことも、この「日本的、の内容をなすものである。

そううえ、同じ旧長州藩出身ながら、武官あがりの山県元老と張りあっている

た文官一筋の伊藤博文 元老（1841・天保12.9.2～1909・明治42.10.26暗殺される。一度の内閣総理大臣を終えた後、明治天皇から、1889・明治22.11.1、元勲優遇の詔勅を下賜され、最初の元老となる。かれの憲法思想は、憲法制定当時のプロシヤ流超然内閣主義から、次第に英国流に近づき、1900・明治33年立憲政友会を創立して初代総裁となり、その第4次内閣（1900・明治33.10.19—1901・明治34.5.2）は政友会内閣である、ただしその政友会は、[○]元首に仮託した党首独裁制、を宣言した政党で、それはまさに世界史的発明であると服部之^{しろう}総氏は皮肉っておられる）がより早く死に、しかも 山県元老が長生したこともあって、たとえ[○]日本的、政党内閣制であってもそれへの移行が、著しく遅れたことは、日本近代政治史の不幸というべきであって、

[○]野党が、総選挙でそれも普通選挙（戦前の日本はここまでであって、しかも1928・昭和3.2.20の第16回衆議院総選挙をはじめとする）さらには男女平等の普通選挙で、実行可能な具体的政策を^{めぐ}回って争い、正々堂々と勝って絶対多数党となり、その党首が、元老の主観的意思を交えない奏薦を経て、後継内閣総理大臣たることの[○]大命降下を受け、軍部大臣現役武官制に災いされることなく組閣し、親任式に臨むというような、真の政党内閣制にまで進み、しかもそれが慣行として定着することが出来なかったのである。

それ故、非常時の到来に順応して、市広い選択範囲から、実践的 政治教育（本文をみられたい）をつんだ国民多数の目で選ばれる、激動期にふさわしい宰相を持つことができなかつたのである。

本文で明らかにしたように、元老が、のちには内大臣が奉答責任者となつて、自分の知っているあるいは自分の育てた人人の範囲だけからしか、後継首班を選び出すことのできなかつたこの後継首班奏薦の制度は、それが政権の基本中枢〔註〕の、しかも中心に位置するものであつただけに、この後継首班奏薦権が、藩閥から、藩閥の残壘たる元老へ、さらに最後の元老西園寺の死とともに、重臣たち（元老西園寺がかつて奏薦した内閣総理大臣前官礼遇者、のちには単に内閣総理大臣前歴者、枢密院議長一枢相一、内大臣一内府一、これらの人人は多かれ少かれかれの感化を受けている。なお奏薦の御下問は、元老なきあとは内大臣に下り、内大臣は自己の責任において奉答するが、その前にならず重臣会議に諮る）に移行したところで、立憲君主臣僚制の大日本帝国史は終るのである。それは、内閣づくりを特

殊階層の密室政治に委ねたままであったといえよう。そして密室政治の弊害は、金権政治や買収・汚職だけではなく、すでにみてきたように人材登用の面にも顕著にあらわれたのである。

1 回の内閣総理大臣を経験して、皇室との関係からみたその家柄のゆえに、また帝国大学卒というその学歴から（変なものが有難がられる国ではあるが）さらに40歳後半という年齢から、実質的に重臣の筆頭に아가ってきたとみられるようになった近衛枢相は、ともかくも自らの第1次内閣を主宰したことによって「しかし、いい学問をしたな」と元老西園寺にいわれた（前出）が、果して彼は何を学んだのであろうか。

1940・昭和15年7月、近衛は矢部貞治（東京帝国大学法学部教授）に、「自分は日中事変についてふかい責任を感じている。この事変を收拾するためには、陸軍部内の意志統一もさることながら、陸軍を抑えうるような『国民の基盤の上に立ったところの国民輿論（世論）を背景にした圧倒的な政治勢力』を背景にもたなければならぬ。そのような政治勢力を結集することが自分の念願である」（前掲「近衛文麿」115—6頁）と語るまでになった。第1次内閣を主宰した経験の学問のおかげであらう。

ところが、一般の被治者国民と接触することのなかった彼は、せっかくえたこの政治的知見も実行に移すことができなかった。すなわち、例えば、さきの矢部に語った言葉につづいて「しかし、既成政党の離合集散からはそのような「国民的政治勢力」は生れない故、¹自分としては新党を創立して、これを率いる考えは全くない。それと同時に²政治新体制が結局一国一党の樹立となり「幕府的存在」になるのを、どこまでも避けたい」と述べ、以上の趣旨に立つて政治新体制を立案するよう矢部に依頼する（前掲「近衛文麿」116頁）のである。ずいぶん虫のよいまた無理な注文である。

元老西園寺公にしたところで、この点では、近衛公と同じことであって、後継内閣首班奏薦権と内大臣・枢相らとの人間的つながりによって、『一にぎりの軍部官僚（昭和軍閥）が、内閣打倒・組閣の妨碍・国策決定・外交決定と、つぎつぎに、政権中枢へ、武力（クーデタ）やその威しや軍部大臣現役武官制によって、侵入してくるところの『日本的、ファシズム化の波』を防ぐにあた

